

大正町物語

相去の由来

東谷(東谷)と蛭食谷(蛭食谷)が、集落の中心で合流した山間谷間に、すなわち(崖崩れ)の多々あるところという意味でつけられたといわれる。
「北川」と「相去」として、長谷川部地検帳の「喜多川村」の項に記されている。
また、郷村帳には「相去連」「相去の」の村名として出てくる。

長七若官長七橋

昔、相去村に住む高目の長七が、人の世の無常をうけ、自ら住まうた墓の中に入っていく。長七の霊を祀ったお宮。現在も目の悪い人に御利益があるといわれ、新原に訪れる人も多い。田舎の山手。畑の杉林のすず。河内神社より約700m下流。

北川を中心とした子どもたちの元気な声や、笑い声がよくひびく。保育園、小学校、中学校。すなわちかわいらしい子どもたちは、地域の宝。

広い田んぼが広がっている。

作業道が網の目のように通っている。17シシの又ク端がたぐひ。

鳥は小石の工地。寺は本村からの分村。本村は「北川カラステ村」とあり、1597年当時には喜多川村、喜多川村と、これより1815年には鳥と「南」路志に記される。

田舎名人
田舎村に住む佐与工門という男は、田舎の名人で、着物を泥一粒、水一滴もつけず、たとえ田舎でも神業をもつていたと伝えられている。

白へび様

昔、弘瀬の華平さんが、橋原の加万川にある龍王様のお参りの帰りに下井井で白へび様の山へ、白へび様のものを見つけた。明かに化けに、やと家に帰った。その白へび様のものは、なんと白蛇をたので、龍王様のお使いであると思い、祠を建てて祀った。大きな2本のササの根元に、2013年己午。ご利益があるかもしれない。1室「白へび田」といふ。

向弘瀬下橋

538架 62.1m
弘瀬の本村と対岸を結ぶ。河原へお参りする方へ、夏は子どもたちの遊び場になる。4車まで通行可。橋脚がたぐひ低い。

参考文献

大正町史
大正のお話